



大図研関西 3 地域グループ合同例会

終了しました

Alma 導入の苦労話を聞こう

～体験者が語る導入のポイントとは～

大学図書館では紙中心のサービスから、電子ジャーナルを含む電子コンテンツの取り扱いが増え、既存の図書館システムだけでは管理しきれず、担当者のアイデアと知恵で何とか乗り切っているのが現状だと思います。特に今年度はコロナ禍の関係で急激に電子コンテンツが増えてその苦労は倍増していると思われま

す。そんな中、世界では、紙の図書、雑誌と電子ジャーナル等の購読契約のある電子情報を統合的に管理できるクラウド型図書館システムが登場し次第にシェアを広げています。そして 2019 年 9 月早稲田大学と慶應義塾大学の図書館が共同運用という形で国内初のクラウド型図書館システム Alma の運用を開始しました。

そして、2019 年 10 月には佛教大学図書館が先の Alma の導入を決定し、現在サービスを開始しています。

今回、佛教大学図書館の飯野さんに来ていただき、国内ベンダーが扱っていない図書館システムを導入するという苦労をなぜ選択したのか？ 国内の図書館システムとは異なる苦労も多くあったのでは？そして今後 Alma 等のクラウド型図書館システムの導入を検討するにあたり、何に気を付ければよいかなど語っていただきます。

日 時 : 2021 年 1 月 10 日 (日) 13:00-15:05

会 場 : オンライン (Zoom)

講 師 : 飯野勝則 氏 (佛教大学図書館 専門員)

主 催 : 大学図書館研究会関西 3 地域グループ

[目 次]

大図研関西 3 地域グループ合同例会 終了しました	…	1
小特集：大図研関西 3 地域グループ合同例会 「Alma 導入の苦労話を聞こう」－体験者が語る導入のポイントとは－ 参加報告	…	2
大図研 関西 3 地域グループ合同例会参加報告	小村 愛美	… 2
大図研関西 3 地域グループ合同例会 「Alma 導入の苦労話を聞こう」－体験者が語る導入のポイントとは－ 参加報告	今野 創祐	… 4

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール : kyoto@daitoken.com (大学図書館研究会京都地域グループ)

URL : <http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

大図研関西3地域グループ合同例会
「Alma 導入の苦労話を聞こう」体験者が語る導入のポイントとは」参加報告

大図研 関西3地域グループ合同例会参加報告

小村 愛美

2021年1月10日、大図研関西3地域グループ合同例会「Alma 導入の苦労話を聞こう」に参加した。コロナの影響下、Zoomでのオンライン開催であった。開会にあたり、京都地域グループ代表の野間口氏から、「ライブラリーサービスプラットフォーム(LSP)への理解を深めよう」との趣旨が述べられた。

講師は佛教大学の飯野勝則氏で、2020年6月に運用を開始したExLibris社のAlmaについて、導入過程や苦労話、留意点などをご講演いただいた。

○導入理由

佛教大学でのAlma導入理由としては、以下の点が挙げられた。

- ・「電子」のコンテンツ管理の改善
- ・安全かつ堅牢なクラウドサービス
- ・5年周期のリプレイスから脱却
- ・デジタルアーカイブやリポジトリの統合管理
- ・MARC21でエンリッチメントされた書誌レコード
- ・世界的図書館コミュニティの一員として活動したい
- ・日本にシステムを通じた図書館コミュニティを作りたい

電子コンテンツ管理の改善、デジタルアーカイブやリポジトリの統合管理は、LSPの特長であるということだった。日本の図書館コミュニティに関しては、各大学が自学のためだけのシステムを作っていると行き詰まるため、標準化などを先々考えていきたい。という飯野氏の思いが述べられた。

○データ移行

旧システムからAlmaへのデータ移行は、まず2019年9月からトレーニング的な時間が始まり、ExLibrisスタッフから英語対応で導入準備の補佐を受けたとのことであった。2019年11月のimplementation projectキックオフ後は、日本語対応のスタッフと週2回程度ミーティングを重ね、並行して佛教大学図書館に移行チームとプロジェクトマネージャーを置いたとのことであった。留意すべきこととしては、契約前に交わす「Request for Proposal(提案依頼書)」に、必要な仕様やサポートについてどんな細かい点も書くこと、記入しなかった事項は提供されない、と述べられた。

旧システムからAlmaへのデータマッピングは、旧システムのベンダーに依頼したそうである。Alma側に移行できるデータ項目は最初の段階で決まっており、また日本では移行事例がないため、特に受入業務関連で移行できないデータが相当あった、とのことであった。更に移行作業の回数はテスト2回・本番1回のみで、緊張を強いられた、とのことであった。

その後、受入、目録、利用者サービス等の各業務について、具体的に紹介があった。Almaの機能には強みがある一方、移行対象外のデータ項目もあるため、図書館側でどのように補うか等の留意点も述べられた。

○これからの展望

佛教大学図書館が Alma を導入し、今後行おうとしていることとして以下の点が挙げられた。

- ・ WorldCat への Publishing : 書誌レコードに OCLC No.を付与
- ・ 電子データ交換 (EDI) : 世界標準への対応
- ・ メールでの自動発注 : Alma デフォルトの発注方式は、受入業務の過程で自動で発注メールが書店に送信される。現在は使用していないが、省力化のため変更を検討
- ・ ライセンスデータの公開 : リモートアクセスの可否や学外者の利用可否などを、検索結果画面に表示させたい
- ・ 佛教大学図書館オリジナルデータベースの統合
- ・ 機関リポジトリを Alma へ統合
- ・ リソースシェアリングの適用 : 学外図書館との資料取り寄せを、Alma の「リソースシェアリング」機能で簡便化したい

○まとめ

まとめとして、留意点と Alma のメリットが挙げられた。

- ・ 図書館置きサーバは残る : クラウドサービスではあるが、ゲートウェイサーバや外部システム連携、データのやり取りをするため、図書館に置くサーバが 1 台必要
- ・ 小さな不具合はある : 日本製システムと比べると小さな不具合は多い。発見したら ExLibris 社に報告。インターフェースの日本語が完璧でない部分もある
- ・ ユーザコミュニティの厚さ : ExLibris 社より Alma のユーザコミュニティが頼りになることも多い。日本語の整備は日本のユーザ館が貢献すべきところ
- ・ API を学ぼう
- ・ アイデア次第で何でもできる : 特に電子関連のワークフローはよくできており、世界的な図書館コミュニティに参加することで視野は大きく広がる
- ・ 総合的なメリットの大きさ : デメリットはいくつかあるが、講演中の留意点でクリアできるものばかり。全体としてメリットが上回る
- ・ 職員には Alma へ乗り換える不安もあったが、導入後は慣れてきている

○質疑応答

質疑応答では多くの質問が寄せられた。Alma 導入館が増えるには？との質問には、NACSIS-CAT との連携、また日本のユーザ館の知見を共有することが必要、との回答であった。Alma を導入してできなくなったサービスは？との質問には、OPAC はなくなったもののディスカバリーサービスで対応できており、利用者からの苦情等もないとのことであった。

個人的には、従来システムからの乗り換えに向けてどのようなスケジュールの段取りだったのか気になり、質問した。通常システムリプレイス始動よりも 1 年ほど前に乗り換えを考え始めたが、諸事情もあり本格的なスタートは通常のリプレイスと同程度の時期だったとのことであった。

○苦労話を聞いて

飯野氏が図書館システムはどうあるべきか、どうなって欲しいのか、イメージを持っておられることが伝わってきた。移行過程の話からは、海外ベンダーのシステムと日本製システムの違いは、なかなか大きいと感じた。導入後のメリットが大きいことは講演から伝わったが、乗り換えるためには一定の知識や技量が必要で、準備期間も長めに取る必要があるとも思った。

目録業務は MARC21 を扱うことが必要で変化が大きいですが、そのことをどのように捉えるか、によって見方は変わる。佛教大学図書館では、スタッフが CAT も MARC21 も扱えるようになれば強みだと前向きに捉えたようで、変化に対する姿勢が窺えた。その他、講演全体を通して非常に具体的で、詳細な話をしてくださり、とてもありがたかった。

資料は公開版を公開予定だそうである。本報告に書ききれなかった詳細、受入・目録・利用者サービスなど、講演中に例示された具体的な業務に関する Alma の利点・留意点は資料に詳しいので、京都地域グループ Web サイト (<https://www.daitoken.com/kyoto/>) を参照していただきたい。

こむら いつみ (大阪大学附属図書館)

**大図研関西 3 地域グループ合同例会
「Alma 導入の苦労話を聞こう」一体験者が語る導入のポイントとは一」参加報告**

大図研関西 3 地域グループ合同例会「Alma 導入の苦労話を聞こう」一体験者が語る導入のポイントとは一」参加報告

今野 創祐

2021 年 1 月 10 日 (日)、オンライン (Zoom) にて開催された、大図研関西 3 地域グループ合同例会「Alma 導入の苦労話を聞こう」一体験者が語る導入のポイントとは一」に参加した。以下、飯野勝則氏 (佛教大学図書館専門員) のご発表のうち、重要なポイントと思える点のみを記述する。

佛教大学図書館では、2020 年 6 月 4 日より、国内ベンダーによる図書館システムに代わり、ExLibris の図書館サービスプラットフォーム Alma の運用を開始した。その理由として、「電子」のコンテンツの管理をしっかりと行いたいことや国際標準 (ISO27001 認証など) を満たした安全かつ堅牢なクラウドサービスの運用に切り替えたいといったことがある。

次に、具体的にどのような日程で旧図書館システムから Alma へのデータ移行が進んだかが語られた。2019 年 9 月に正式なキックオフより前のトレーニング的な期間が設けられ、外国の方による英語での対応がなされ、2019 年 11 月にキックオフがあり、本格的な導入が始まり、それ以降は日本語での対応となり、後は週 2 回程度のミーティングが重ねられ、システムティックな移行が行われた結果、2020 年 6 月の正式運用に至った。

最初に気をつけるべきことは、契約前に取り交わす RFP (提案依頼書) にどのような細かいことでも書いておくということである。日本語で導入の対応とサポートは全て行うことをしっかりと記述する。RFP は日本語で書き、それを英訳して誤りが無いかチェックするという作業を行った。

Alma への移行にあたっては様々な学務データとのマッピングが必要となる。また、データの Alma へのロードはテストが 2 回、本番が 1 回と厳密に決まっているため慎重な作業が必要であった。

以下、様々な業務ごとに移行の実態を見ていく。

まず受入業務に関して。過去および「発注中」の発注データ、過去の予算データなどは移行プログラムに入らず、基本的に API 等を使って図書館側の責任でデータを移行

する必要がある。また、紙業務、電子単発のそれぞれの場合の基本的なワークフローが示された。受入業務に関して気をつけるべきことは以下の通りである。日本では会計監査上で使われる帳票等については決まったテンプレートが無いので、標準機能の OBI を用いて図書館で作成する必要がある。また、日本の図書館システムで言うところの「除籍」の概念は Alma には無いため (Alma ではデータが完全に消去される)、日本の図書館システムのように除籍したものを永続的にシステム内で管理するには工夫が必要である。

次に目録業務に関して。CATP から MARC21 への書誌移行は大過なく完了した。書誌レコードのエンリッチメントが実現したというメリットは素晴らしい。反省点としては 2 回しかないテストロードの機会を十分に生かせず、3 回目の本番データのロード後に多少の問題が残ったことが挙げられる。NACSIS-CAT との連携は一方通行であるが、将来に向けた対応も進行中とのことである。電子の所蔵レコードについては自動管理機能があり、Science Direct、ProQuest、Springer Link の Ebook Central で購読・購入した EJ や Ebook の Holding が、出版社の記録をもとに自動でリゾルバ等に反映されるためとても便利である。佛教大では目録担当者は MARC21 になることに全員が賛成したが、事前にコンセンサスを得る必要がある。MARC21 の「所蔵 (Holding)」と CATP の「所蔵」の概念は異なるため、Alma の資料を読む際や導入の際の意思疎通に注意が必要である。MARC21 は自由度の高い設計であり、CATP > MARC21 という変換の場合、対応するフィールドが複数ある。

利用者サービスに関して。利用統計、帳票が充実している。OBI を用いて様々な統計や帳票を作る。外部システム (入退館ゲートや学籍・人事管理システム) と連携するには、ゲートウェイを外部システムと Alma の間に入れる必要がある。Alma のデータフォーマットは XML であり CSV では利用者データをとりこめない。外部システムごとにベンダーが異なるため、個別対応は高額になる。外部システムの使用は旧図書館システムそのままにデータのみを“ゲートウェイ”形式に変換して初期費用を抑えるという手がある。予約、取置、現物借用、文献複写に関して。コロナ禍で送本 (自宅配送) サービスや複写送付 (自宅送付) サービスをおこなったが Alma ではそのワークフローが標準機能として搭載されていることはメリットであった。NACSIS-ILL には未対応であり、ILL は受付と管理のみ Alma で行っている。特筆すべき特徴として、「発見」能力の向上がある。OpenBD 由来のあらすじや目次データがインデキシングされ検索の対象となったことで旧図書館システムの OPAC では検索できなかった書誌レコードが多数発見できるようになった。和古書の解題なども同時にインデキシングされ検索対象となったほかデジタルコレクションのメタデータ全般を Alma で管理可能となった。これにより「紙」の所蔵と「デジタル」へのリンクが一つの詳細画面で表示されるようになった。利用者サービスに関して気をつけるべきことは以下の通りである。学年、学部、学科といった日本で当たり前に使われていそうな項目に該当する専用のフィールドがないため、本当に必要なデータのみを限られたカスタムフィールドに登録する必要がある。貸出条件、リクエスト条件などの設定が複雑である。資料の排架場所については本籍に当たる「パーマネント」な排架場所と居住地にあたる「テンポラリー」な排架場所が用意されている。「除籍」や「OPAC 非表示」といった概念は後者を使って管理できるがやりすぎると蔵書点検が困難になるおそれがある。リクエストの申込フォームなどの自由度が低いので工夫が必要である。OPAC は存在せず蔵書検索の仕組みはないので、ディスカバリーのみを利用するが、修正の反映にやや時間がかかる。

以上を踏まえて、佛教大学図書館がこれからやろうとしていることについての説明があり、以下が挙げられた。

- Worldcat への Publishing

- ・電子データ交換 (EDI)
- ・メールでの自動発注
- ・ライセンスデータ (EJ の利用条件) の公開
- ・ライセンスデータの API 連携
- ・書誌レコードの自動エンリッチメント
- ・佛教大学図書館のオリジナルデータベースの統合
- ・機関リポジトリの統合
- ・リソースシェアリングの適用

次に、最後に気をつけてほしいこととして以下が挙げられた。

- ・図書館サーバは完全になくなるわけではないこと。
- ・不具合は結構あること
- ・日本語の表現で奇妙なところがあること

一方で Alma のコミュニティの厚さは素晴らしいものであり、ウェブサイト上で情報を交換できるユーザコミュニティが頼りになる存在で、現状、英語でのコミュニケーションではあるものの、何かをやろうとしたら他の誰かが同じことをしているというケースも多いことが指摘された。様々なものが Alma の内外でシェアされていること、API を勉強することが重要であることも指摘された。

最後に、Alma の特徴として、本当にアイデア次第でなんでもできるということ、特に電子に関するワークフローがよくできていること、気をつけることを本発表では中心に述べたがクリアできる問題ばかりでありむしろメリットが多かったこと、導入に際して不安もあったが職員はいつの間にか Alma のワークフローや用語に適應していったことが示され、発表が終わった。

その後、質疑応答となり、他の図書館に Alma が広がっていくのに必要なことは何か、予算をどのように確保するか、海外の会社とのやりとりでの要望の工夫、利用者サービスについてできなくなったことはないか、ユーザコミュニティへの貢献は義務か、何年か期限を区切った契約となっているのかといった質問が寄せられた。

今回のご発表では、国内ベンダーが扱っていない図書館システムの導入という、あまり日本では多くないであろう事例について、詳細も含めてのご説明があり、とても貴重な勉強会であったと思う。改めて、ご発表してくださった飯野さん、また、この企画を担当してくださった大学図書館問題研究会関西 3 地域グループには、感謝を申し上げます。

ありがとうございました。

いまの そうすけ (京都大学工学研究科吉田建築系図書室)